

毎年8月15日の「終戦の日」と前後して、8月初旬から中旬には第二次大戦の悲惨な戦争の記憶を掘り起こし、後世に伝えるテレビ番組、新聞特集記事が多くなる。

今年は戦後80年の節目ということでも、例年より増えたようだ。80年前の実体験の「語り部」は90歳の「卒寿」を超える高齢なので、今年の報道では、その役割を次世代に引き継ぐ必要性が強調されたが、若い世代から新たな担い手になる決意表明もあった。

戦争が繰り返される現実

「戦争の記憶」のうちには、国難に立ち向かって果敢に闘ったあるいは銃後であって地域を支えた、日本人の記録がある。苦難と欠乏の中で戦後復興に努めた「戦後の記憶」もある。これらについてはぜひ発掘して後世に伝えるべきだ。そこには極限状態の中で表れた日本人の美質の結晶がある。これに対し「広島」「長崎」の被爆体験と合わせ、「悲惨な戦争の記憶」を語り継ぐ際には考えるべきことがある。こちらの記憶継承の主たる目的は世界で核爆弾が

語り継ぐべき戦後「平和の記憶」

正論



平成国際大学副学長
浅野 和生

「悲惨さ」叫ぶだけでは

日本の近代を振り返れば、明治維新から先の大戦の終戦まで77年間に、対外戦争が少なくとも8回あった。つまり10年に1回を上回る。当時は徴兵制だから、一般の国民にとって戦争は人ごとではなかった。日露戦争の旅順攻撃では司令官を務めた乃木希典大将の息子の1人が戦死し、日本軍の戦死1万6千人余、負傷4万5千人超と凄惨を極めた。その様は日本中に知られたが、「二度と戦争をし

ない」ことにはならなかった。「悲惨な戦争の記憶」を伝えても、二度と惨劇が繰り返されないわけではない。

第2の問題は、広島と長崎の被爆体験の語り部についてである。

世界には健全な民主主義国だけがあるわけではない。平和を求め

る国民の意思を、国家指導者が無視できる一党独裁その他の独裁国家があり、また軍勢力を使用しての領土の拡張や利権獲得を国益美と凄惨を極めた。その様は日本中に知られたが、「二度と戦争をし

ない」ことにはならなかった。9月3日、中国の「抗日戦勝記

念日」の式典には、天安門の楼上に習近平国家主席、ロシアのプーチン大統領、北朝鮮の金正恩総書記の3人の核保有国首脳が並んだが、彼らの国はどうか。1979年の中越紛争は中国が一方的にベトナムに侵入して始まった。2022年2月にロシア軍が突如としてウクライナに侵襲してウクライナ戦争が始まった。1950年6月、金総書記の祖父・金日成主席が、韓国に奇襲攻撃をしかけ、朝鮮戦争を勃発させた。

こうした非民主主義国の好戦的指導者にとって破壊力が大きく、相手に大きな打撃を与え、惨劇を引き起こす核兵器は、目的遂行のためにきわめて有効である。実際に使用すれば強力な武器になるし、使用意思を示すだけでも、威嚇効果で相手を屈服させられる。

ところで核兵器の威力は、TN-T火薬何トン分といった数値で表されるが、それを見ても文民の指導者や一般国民には破壊力がイメージできないだろう。しかし、日本人の努力で広島、長崎の被爆体

験の凄惨さが世界に広まると、人々は広島型原爆の20倍の破壊力の核弾頭などと言われれば恐れおののくことになる。つまり悲惨さが共通認識になることで、「核を使え」という脅しの威力は増すのである。

それゆえ、広島、長崎の語り部は、たしかに核戦争を忌避する人々を世界に生み出してきたが、同時に、好戦的な核保有国の指導者たちを喜ばせているかもしれないのだ。

また、中国には反核の声は届かず、1年で核弾頭を1000発増加、北朝鮮も核拡大中である。さて戦後80年、日本はこの間に一度も、対外戦争を行わなかった。明治維新から終戦の77年を超える長い年月である。では、どうして80年もの長い間、平和を維持することができたのか。その国内外的要因を検証して後世に伝えることは、世界平和に貢献する道になる。つまり、日本がしっかりと語り継がなければならないのは「悲惨な戦争の記憶」より、「80年の平和の記憶」ではないか。

(あさの かずお)